OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞『ニコライ堂の女性たち』
Author(s)	三谷, 拓也
Citation	懐徳堂研究. 2010, 1, p. 153-175
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評『ニコライ堂の女性たち』（中村健之介・中村悦子著、教文館、二〇〇三年）

三谷拓也

本書は、明治から大正にかけて、創立期の日本正教会で活動した七人の女性信徒たちの伝記である。

本書の「まえがき」にもあるように、ロシア正教会を母体とする日本正教会は、日露戦争、ロシア革命、東西対立などの時代の荒波の中、困難な歩みを続けざるを得なかった訳だが、そのような中にあって教会を支え続けたのは、多くの女性信徒たちだった。しかし、その大半の女性たちの名前も人生も、共に忘却の淵に沈んでいる。本書では、特に正教会の創立期に顕著な働きを成した七人の女性信徒たちについて、丹念な調査の積み重ねによって光を当て、彼女たちの存在を、日本のキリスト教受容史、女性史の中へ再位置づけしようと試みている。信仰そのものには客観的な距離を保ちながらも、それぞれの女性たちの「ことばを聞きたい、それを、できることなら過去からいまへ解き放ちたい」と願う著者たちの共感に満ちた姿勢が、本書を優れた伝記としている。

なお、巻末には人名索引、陰陽露暦対照表、年譜が付されている。また、本文の各所において貴重な写真、家系図などが多く掲載されている。注も詳細である。

本書が懐徳堂と関係するのは、第七章が、懐徳堂最後の学校預人を務めた中井桐園の子である木菟麿（一八五五～一九四三）と、その異母妹に当たる終子（一八七七～一九五五）の伝記に充てられているためである。特に終子は、教育の分野においても、また懐徳堂の遺物および記録保存においても大きな働きを成した人であったが、これまで多くを語られることがなかった。

本稿では、主に本書の第七章（執筆は中村悦子氏）によりながら、木菟麿・終子兄妹の正教会内における活動に焦点を当てつつ、本書の記載について訂正および補足を心がけ、合わせて木菟麿がニコライ（俗名イヴァン・

ドミートリェヴィチ・カサートキン、一八三六～一九一二）と共訳した正教聖典の特徴について私見を述べてみたい。

生い立ち

木菟麿と終子の生い立ちについては、本書でも詳述されているので、ごく簡単に記しておきたい。二人の父に当たる中井桐園（一八二三～一八八一）は、履軒の孫に当たるが、竹山の子である碩果の養子となり、中井宗家を継いだ人である。桐園の最初の妻である霜は、第六代学主並河寒泉（一七九七～一八七九）の長女である。寒泉も、その妻歌も共に竹山の孫であったから、つまり木菟麿は、父方では履軒の曾孫であり、また竹山の義理の曾孫でもあり、母方では竹山の玄孫でもある。桐園と霜の間には、績（夭折）、木菟麿、蘭（一八五六～一九四二）の三人の子がいた。蘭は最後に至るまで専ら中井家の家政に当たった。

明治元年（一八六八）、霜が亡くなったため、翌二年一一月、桐園は医師小笠原孝治の次女春を後妻に迎えた。桐園と春の間には、二郎（夭折）、二三（夭折）、終子の三子が生まれた。春もまた竹山の曾孫であったから、木菟麿と終子は異母兄妹であると同時に再従兄妹という関係になる。[二] 二人の年齢には二二歳もの開きがあるが、中井家の血を最も濃く受け継ぐ者として、共に深い繋がりを感じていたことは想像に難くない。

懐徳堂が閉校したのは、明治二年（一八七〇）一二月二五日であり、この時、木菟麿は一四歳だった。その前年の明治元年七月一九日に助教であった叔父並河蠖街が二〇歳の若さで亡くなっており、その一週間後の七月二五日には母霜が三九歳で亡くなっている。「少年木菟麿にとって明治という新しい時代は、激しい時代による不安の上に、最も身近な者の死と自家の滅亡という悲運が重なってはじまったのだった。」（本書四四五頁）

この時、木菟麿の心に抱かれた深い悲哀が、やがて懐徳堂復興の熱望となり、後年の正教信仰と並んで、木菟麿の内面に「激しい精神的緊張」を強いたとの本書の指摘は、恐らく正しいであろう。木菟麿自身は「己巳殘愁録」[三]に当時の感慨を綴っている。

懐徳堂の閉校後、並河、中井両家は北本庄村に移転し、家塾を開いた。しかし、寒泉は明治三年（一八七〇）三月から、四女豊の嫁ぎ先である淡輪家に移った。西洋嫌いで、明治になっても髷を結っていたという寒泉は、木菟麿の正教への入信に対して憤りつつ、明治一二年（一

八七九）二月八日、八三歳で亡くなった。

木菟麿は祖父寒泉と住居を共にしていた。木菟麿が父桐園ではなく寒泉と同居していたのは、幼時より寒泉から漢学の手ほどきを受けて馴染んでいたこともあっただろうし、木菟麿自身が寒泉の人柄を強く慕っていたことも一因であろう。木菟麿の理想家肌で、精神的な物事に没頭しやすい性格を考えると、穏やかであった父桐園よりも、むしろ悲憤慷慨を事とし、赤穂浪士を慕って木刀を身辺から離さなかったという寒泉との気質の類似が感じられる。

一方の桐園は、明治六年（一八七三）まで家塾を続けていたが、同年三月に招聘を受けて江南小学校の教員となり、教員辞職後は南江戸堀に家塾「好徳学院」を開き、同一四年（一八八一）一月、五九歳で亡くなった。終子は、その間の明治一〇年（一八七七）三月二四日（戸籍上は一三日）、北区梅ヶ枝町に生まれている。

木菟麿はその後、大阪府師範学校（大阪教育大学の前身）に入学し、第一期生として卒業後、小学校の教師を務めた。このことには、父桐園の影響もあったろうし、往時の懐徳堂が初等教育の場としての役割も担っていたことを考えれば、新時代の儒者にとって小学校教員はまだしも己の才を生かし得る職業の一つだったのだろう。

なお、本書には「天王寺の師範学校」を卒業したとあるが、大阪府師範学校が天王寺に移るのは明治三四年（一九〇一）である。明治七年（一八七四）五月、現在の中央区南御堂に「教員伝習所」が設立され、翌年八月に「大阪府師範学校」と改称、明治一〇年（一八七七）二月まで同所にあったので、木菟麿は恐らくここに通ったのではないだろうか。通学期間は一年間であった[三]というから、およそ二十歳前後で小学校に奉職し、明治十一年（一八七八）三月に洗礼を受けるまで、三年間ほど教員として勤務したことになる。

正教への入信と『回天新報』の発行

大阪で正教の伝教が始まったのは、明治七年（一八七四）、笹川定吉（元仙台藩士）によるという。この時には何の成果も得られなかったというが、明治一〇年（一八七七）に橘公威が、同郷の肥前大村藩士であった長與貫一に教えを伝え、それから大阪に正教が広がったとされる[四]。

これは推測なのだが、この長與貫一という人は、同じ大村の藩医の子で、適塾に学び、医薬制度の確立に尽力した長與専斎（一八三八～一九〇二）と同族で、やはり

医家の一族だったのではないだろうか。[五]

明治一一年（一八七八）三月三日（大阪正教会所蔵「メトリカ（洗礼簿）」には三月二日とある）、木菟麿を含めた三五名（三三名、三六名ともいう）が大阪で初めて正教の洗礼を受けたが、これらの信徒は、自らの集まりを「聖パンテレイモン会」と名付け、今橋通淀屋橋東にあった増井亀次郎の洋式薬局「精々舎」[六]を仮教会とした。聖パンテレイモンは医師であったと伝えられ、医薬業の守護聖人であるから、この会の命名は、当初の正教信徒に医薬業者が多かったことを自ずと証しているのではないか。

木菟麿が入信したきっかけは、懐徳堂内に同居していた医家の古林家の出である、古林見蔵の勧めによるという。つまり、長輿貫一が医家の一族であったとすれば、当初、医薬業者を中心に正教の信仰が広がったのであり、そこから古林見蔵を通じて懐徳堂の人々へも伝えられたのではないだろうか。本書では、土佐の自由民権運動の関係者から木菟麿に正教の信仰が伝えられたのではないかと推測しているが、むしろ医薬業者を通じての可能性が高いのではないだろうか。

また、この時に同じく洗礼を受けた萱野一平は、赤穂浪士萱野三平の子孫に当たる人だが、萱野家はやはり懐徳堂の門下でもあった。[七]（子孫の和子は、後に終子の養子となって中井家を継ぐことになる。）

さて、先述した今橋の仮教会が、明治一二年（一八七九）に道修町[どしょうまち]五丁目の樋口宅[八]に移り、明治一五年（一八八二）には天満橋南詰石町[こくまち]一丁目にあった旅館三橋[さんきょう]楼[ろう]跡の地所に壮麗な聖堂（戦災で焼失）が建立されたことを思えば、いわゆる船場一帯の、特に資産家や医薬業者、知識層などの間において、小さな形であれ正教徒のコミュニティがあったのではないかと推測されるのである。[九]

こうして正教に入信した木菟麿は、同時に小学校の教員も辞職したのだが、当初、教会内で信仰生活に専念するつもりはなかったようである。

洗礼を受けた同年の明治一一年（一八七八）八月、自由民権運動の土佐立志社による「愛国社再興大会」が大阪で開かれ、それに影響を受けたのか、同年九月二七日、木菟麿によって『回天新報』と名付けられた政論雑誌が発行されている。内容に宗教的なものはなく、純粋な政治誌である。北崎豊二氏の論文[一〇]では、『回天新報』に掲載された木菟麿の政治論は未熟でありながらも、経術による社会改革を重視した懐徳堂の学風を受け継いでいることが指摘されている。

翌一二年（一八七九）五月一三日、木菟麿は安土町の自宅で「天楽書院」（「天楽」は曽祖父履軒の号）と名付けられた私塾を開いている。この命名からも、木菟麿の家塾復興の願いが若年時から変わらぬものであったことが知られる。

しかし、同年七月には正教の公会で副伝教者に指名されたことにより、信仰生活に専念することを決心したのであろう。『回天新報』の編集は人に譲り[一二]、私塾も閉め、伝教担当地へ移住することになった。当初は大阪で伝教を開始したようだが、『ニコライ日記』一八八二年六月八日および一二日によれば、明治一三年（一八八〇）、教会の命により和歌山へ、同年一〇月には加古川へ移住した。

播磨地方での布教と東京への移住

加古川に居を移した木菟麿は、加古川（寺家）、三木、小野、社など、東播磨各地で熱心に伝教を続けた。明治一五年（一八八二）六月八日、加古川へ巡教にやって来たニコライは木菟麿に対し、すぐ東京に来て自分の手伝いをするよう促したという。この日の『ニコライ日記』は残されており、木菟麿の名前が初めて現れる日でもある。

パウェル中井は毎月寺家町と小野町と横山とに分けて滞在している。しかし、これらの地のどこにも、いまでは一人の新しい聴教者もいない。かれは毎晩八時ごろに信徒向けに講義を行っている。集まるのは四、五人。いまはマトフェイ〔マタイ〕に因る聖福音の講釈をしている。〔中略〕中井は近い将来に、ここで成功を収めるだろうとは見ていない。〔中略〕加古川滞在中はイオシフ木村の家に厄介になった。かれのところには伝教者〔木菟麿〕も世話になっており、祈祷のために集まる部屋もある。伝教者は在宅ではなかった。かれは見当違いの方向にわたしを迎えに行ったのだ。

残念ながらこの日の日記に、木菟麿の東京行きに関する記述は見られない。しかし、実際に中井家は翌月に上京しているので、ニコライの招聘は事実だったと考えざるを得ない。

では、なぜニコライが特に木菟麿の名前と教養を知った上で、自らの聖典翻訳の伴侶として選んだのか、という疑問が浮かぶ。本書ではその遠因を、嘉永七年（一八五四）九月、国交締結交渉のため来日したエフィーミイ・ヴァシーリエヴィチ・プチャーチン（一八〇三～一八八

三）の率いる軍艦ディアナ号が、前触れもなく大阪湾に出現した事件に求めている。

この時、懐徳堂の並河寒泉と中井桐園が幕府から接待掛を命じられ、海上の小船でロシア方通訳官と漢文で応対した。この事件については、寒泉によって『拝恩志喜』と題された漢文にまとめられており、懐徳堂では幕府から拝領した白銀の目録を台に載せたまま保管し、毎年それを出して記念していたという。恐らく木菟麿もこの逸話について、祖父や父から問わず語りに幾度も聞いていたことだろう(一二)。

一方、この時に中国語通訳としてロシア艦隊に同行していたヨーシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチ（一八一四～一八七五）は、後に初代駐日領事として函館に赴任し、その領事館付き司祭として来日したのがニコライである。ニコライは、恐らくゴシケーヴィチから過去の興味深い逸話を色々と聞いていただろうし、後述するように中井竹山の『逸史』も読んでいたため、懐徳堂についても著名な儒学の家として聞き知っており、そのために木菟麿を自らの翻訳事業の伴侶として選んだのかも知れない。

また、明治一二年（一八七九）三月、ニコライが聖堂建立に向けた資金調達のためロシアへ一時帰国した際、プチャーチンに家族同様に親しく迎えられ、その後も熱心な支援を受けているから、プチャーチン本人からも様々な逸話を聞かされたことだろう。

続いて本書では、いよいよ一家が東京に発つ直前になって、木菟麿が家族を説得して正教に入信させたとあるが、これは思い違いではないだろうか。

大阪正教会所蔵「メトリカ」によれば、明治一五年（一八八二）四月一六日の項に、中井春と中井秋の洗礼の記録がある。住所は「大阪府下北桃谷町三十七番地」とある。ここにある「中井秋」とは、聖名がワルワラ、年齢が六年とあるから、終子に違いない。つまり、終子の本名は「秋（しゅう）」であり、終子の名は後の改名ではないのだろうか。更に言えば、この改名後の「終」の文字には、自らが中井家の血統の最後となる自覚と覚悟が、強く込められているのではないだろうか。この終子の名前の問題について触れた文献は、本書も含めて管見には入らなかったので、ここで一言記しておきたい。

さて、『ニコライ日記』一八八二年（明治一五）六月一三日には次のようにある。先に引用した加古川を発ってから五日後である

八時にイアコフ神父とともに執事やしかるべき他の

者たちの訪問に出かけたが、けっきょく、訪問できたのはアヴラアム長与（わたしが洗礼を施した者で、どうやらたいへん裕福に暮らしているらしい）と、伝教者パウェル中井の母（これは四、五歳になる娘と住んでいる。家族はこれだけ。亭主は昨年亡くなったのである）と、執事が一人だけ。しかし、このうちあとの二人は不在。中井の母は教会に行っており、〔後略〕

この記録からも、ニコライから上京の要請があった時点で、春が既に洗礼を受けていたことが知られる。「四、五歳になる娘」とは終子、「昨年亡くなった亭主」とは桐園に違いない。また、ニコライが中井家を「しかるべき者たち」として考え、わざわざ自ら訪問しているのは、注目すべきことであろう。

一家の上京に際しては、終子の母方の小笠原家から強く反対されたというが、木菟麿の熱意と一家の信仰心が勝ったのであろう。明治一五年（一八八二）八月一日発行の『教會報知』第四〇号には、「敝社員中井」による、ミトロファン楊吉を送る五言詩「追賡王維送秘書晁監韻送密徳羅芳神父還清」が掲載されているため、既にこの時期には、木菟麿が東京本会で活動を始めていたことが知られる。

木菟麿の正式な身分は「愛々社（正教会の出版部）社員兼ニコライ主教の翻訳協力者」であった。月給は明治二九年（一八九六）の時点で二五円とある。[三] 明治三三年の小学校教員の初任給（諸手当なし）が一〇円から一三円、正教会の伝教者の月給は一五円、司祭は三五円であったというから、[四] 中井家のおおよその暮らしぶりは想像がつく。女性三人を養いながらの家計は、決して豊かではなかっただろう。

ニコライと木菟麿による正教聖典の翻訳

正教は元来土着化する傾向の強いキリスト教であり、今日の各国正教会においても、それぞれが現地語による聖典を持ち、現地語で奉神礼を行うのが原則である。これは、東ローマ帝国が周辺諸民族に伝教する際、聖典をギリシャ語からそれぞれの現地語に翻訳して以来の伝統で、ラテン語を「神の言葉」として不変のものとしていたカトリックとは、著しく対照的である。

また、カトリックやプロテスタント諸派とは異なり、正教会が自ら宣教団を派遣して積極的に伝教を行うこと

は稀で、移民による自然的伝播か、あるいは聖職者個人の篤志による場合が多い。日本に初めて正教を広めたニコライも、当初はあくまで個人の発意に基づいていた。文久元年（一八六一）六月六日、ニコライが来日した当時はキリシタン禁制であり、立場はあくまでも函館領事館付きの司祭でしかなかった。しかしニコライの目標は、当初から日本人の自治による正教会を日本の地に立ち上げることにあった。

ニコライは、アラスカ（当時はロシア領）でアリュート語により原住民に伝教したインノケーンチイ（一七九七～一八七九、後にモスクワ府主教となる）から、正教の日本への土着化を図るため、日本語を学ぶよう強く勧められた。ニコライはその後の伝教に備えて、八年間に渡り多くの教師につきながら、四書五経を初めとする漢籍や仏典、歴史書などを参考として、漢文と日本語、および日本の歴史や文化、諸宗教の学習を続けた。

Д・М・ポズニェーエフの指摘によると、ニコライは日本の歴史を学ぶに当たり、『大日本史』、巌垣松苗『国史略』、頼山陽『日本外史』、中井竹山『逸史』などを参考にしたという[一五]。すなわち、ニコライは来日間もない時点で、既に中井家と懐徳堂の存在について知っていたのである。同時に『古事記』と『日本書紀』の原典も学んでいるが、『古事記』をニコライに教えたのは、若き日の新島襄（一八四三～一八九〇）である。

ニコライの漢文読解力は抜群で、他の外国人より遥かに抜きん出ていたと言うが、後に木菟麿と共に漢文訓読体によって聖典翻訳を行ったのは、こうしたニコライの素養による所も大きいだろう。

正教の日本への土着化を図るには、聖典の日本語訳が不可欠である。明治元年（一八六八）一〇月、インノケーンチイ宛の書簡[一六]によれば、当時、ニコライは新約聖書の大半と、聖史略、教の鑑、教理問答、小祈祷書などを漢文から、啓蒙礼儀と帰正式を教会スラヴ語から翻訳している。一部は石版印刷によって刊行されたものもあったが、大部分は恐らく試訳の段階に止まるものだったろう。

実際に当時の正教徒に用いられていたのは、清国正教会によって同治二年（一八六三）に刊行された教理書『東教宗鑑』、および同治三年（一八六四）刊行の新約聖書『新遺詔聖經』、あるいは上海美華書館により同年刊行のプロテスタント旧新約聖書などの、漢文テキストであった。初期の正教信徒は、士族や医師など儒教的教養を身に付けた者がほとんどであったから、こうした漢文聖典を読みこなすことができたようだが、当然白文であるため、読解には困難を伴った。

祈祷書や教理書の刊行が続く一方で、聖書本文の翻訳において、正教会は大きく出遅れていた。[七] 明治一二年（一八七九）に完成したプロテスタント訳による新約聖書が、その後の日本文化に大きな影響を与えたことは周知の通りである。しかし、外国人でもあるニコライにとって、独力で膨大な聖典を和訳することは不可能であったろうし、それにはどうしても有能な助手が必要だった。こうして正教会の聖典翻訳が焦眉の問題になろうとしていた時、木菟麿に白羽の矢が当たったのだった。

明治二二年（一八八九）、ニコライと木菟麿により、前述の上海美華書館版プロテスタント新約聖書に訓点とロシア語読みを付けた『訓点新約聖書』が発行され、実際に教会の奉神礼においても使用された。なぜプロテスタントの漢文聖書を用いたのか不明であるが、それが日本語として表現が熟したものではなく、訳語の正当性も保証できないことは間もなく明らかになったのだろう。結局、明治二八年（一八九五）九月二日より、二人は自らの手で一から新約聖書の翻訳を始めることになった。同日の『ニコライ日記』には次のようにある。

> 夕方六時からわたしとパウェル中井は自分たちの仕事（新約聖書の翻訳だ。マトフェイ〔マタイ〕による聖福音）の翻訳を始めた。最初の一六節を翻訳した。つまり名前を書き写したのだ。わたしたちは長い間「福音経（ふくいんけい）」と新約聖書の題を考えていた。また「息子」を「子（こ）」と訳すか「裔（すえ）」と訳すかなど話し合った。

翌九月三日には次のようにある。

> パウェル中井といっしょに、朝は七時半から一二時まで、夜は六時から九時まで聖書の翻訳をした。これは毎日規則的に続けられるので、今後このことについて言う必要もない。

一方、木菟麿の『黄裳齋日記』[八]同年九月二日には次のようにある。

> 往來　〇午前八時升堂受業初ノ祈禱ニ豫ル　〇終リテ后主教ニ如ク翻譯ハ今夜六時ヨリ初ムベシトノ「コト」ナリシヲ以テ直チニ歸ル〔中略〕〇午后六時露館に如ク
> 業務　本日ヨリ初メテ新約經翻譯ノ業ニ就ク

木菟麿の回想録「大主教ニコライと私」(『正教時報』昭和一七年九月号)によれば、上京してすぐの明治一五年(一八八二)九月より、毎日変わらぬ翻訳作業が始められたと書かれているが、思い違いであろう。二人の日記からも分かるように、正しくは、明治二八年(一八九五)より、ニコライ死去の年に当たる明治四五年(一九一〇)に至る、約一五年間である。

明治二九年(一八九六)一二月八日、新約聖書の翻訳は一年四か月足らずで一旦完了した。その日の『ニコライ日記』にはこうある。

テキストをしっかり理解し、わかりやすく表現するために、ありとあらゆる方法を使った。われわれの前には、三種のギリシャ語版、二種のラテン語版、教会スラヴ語版、ロシア語版、英語版、フランス語版、ドイツ語版、三種の漢訳版、日本語版、ロシア語と英語の注釈書、そしてありとあらゆる注釈書を揃えてあり、毎日毎日、ほとんど毎時間これらを掘り返して調べたものだ‐簡単に言うと、細心の注意をつくして翻訳したのだが、それでもたいして良い出来栄えではないのだ。

翻訳の完了後も、二人は推敲に長い時間をかけた。まず、ロシア語の聖書辞典から言葉を抜き出し、それに対応する日本語訳を定め、用語を統一した。また、聖典は奉神礼の中で詠まれ歌われるものでもあるから、二人で朗読しながら確認も行っている。

『ニコライ日記』には、翻訳に伴う多くの逸話が記されている。例えば、司祭の佐藤秀六(元漢学者)が、「読マザリシカという用法は間違いで、シの後はヤが正しい」と言った所、木菟麿は「カが正しい」と主張し、二人で論争を始めている。(一九〇〇年四月六日)

木菟麿はまた、結合接続詞「ト」は最後の名詞の後にも置くのか置かないのか、あるいは「居(ヲ)レリ」という用例は正しいのかどうか、という問題について、新井白石や「自らの先祖で学者としても有名な中井一族の著作」、あるいは旧幕時代の用例などを渉猟し、更には、大槻文彦、林甕臣(みかおみ)、落合直文といった著名な国語学者を実際に訪問した上で質問している。結局、落合の説により、「ト」は最後の名詞の後にも置く、「居レリ」は誤用、という結論に落ちついている。(同年一一月九日、一〇日)

こうした二人の苦労が実り、明治三四年(一九〇一)、新約聖書の翻訳は、『我主イイススハリストスの新約』と題して発行された。

ここで、ニコライと木菟麿の訳による新約聖書の文体の特徴を伺うため、その翻訳の元となったギリシャ語原文、および参考とされたロシア語訳と漢訳、更に他の和訳の代表としてプロテスタント訳を併記して、考察してみたい。[一九] 引用箇所は、マトフェイ（マタイ）に因る聖福音、第五章、第三および八節である。

ギリシャ語原文

Μακάριοι οἱ πτωχοὶ τῷ πνεύματι, ὅτι αὐτῶν ἐστιν ἡ βασιλεία τῶν οὐρανῶν. ... μακάριοι οἱ καθαροὶ τῇ καρδίᾳ, ὅτι αὐτοὶ τὸν θεὸν ὄψονται.

ロシア語訳（宗務院訳、一八六七）

Блаженны нищие духом, ибо их есть Царство Небесное. ... Блаженны чистые сердцем, ибо они Бога узрят.

漢訳（『新遺詔聖經』、グーリイ・カルポーフ訳、一八六四）

神貧者爲福、因天國係伊等所有。…心淨者爲福、因伊等將得見天主。

ニコライおよび木菟麿訳（一九〇一）

神の貧しき者は福なり、天國は彼等の有なればなり。…心の清き者は福なり、彼等神を見んとすればなり。

プロテスタント訳（一八七九年、一九一七年改訳）

幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。…幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。

まず冒頭の句について見れば、ギリシャ語原文とロシア語訳は、いずれも倒置構文による強調表現を取っている。この倒置構文を生かそうとしているのが、プロテスタント訳の「幸福なるかな、心の貧しき者」だが、結果として原文にはない句点を挿入している。逆に漢訳とニコライ・木菟麿訳は、句読点も原文に忠実にしており、結果として倒置構文の模倣は放棄している。

また、漢訳とニコライ・木菟麿訳は、希 πνεύμα 露 дух（高位の霊的実在）に当たる言葉を「神」、希 καρδία 露 сердце（低位の精神的活動）に当たる言葉を「心」とし、訳語を対応させているが、一方のプロテスタント訳では、この箇所について両者とも「心」としており、訳し分けはしていない。

更にニコライ・木菟麿訳では、いわゆる「神」について、「天主」「上帝」といった漢語は用いず、「神」という和語を採用している。そのため、「神」と「神」とい

うように、振り仮名によって意味の弁別を行っており、苦心の跡が偲ばれる。

人称については、ギリシャ語原文もロシア語訳も明らかに複数であり、漢訳は「伊等」、ニコライ・木菟麿訳は「彼等（かれら）」と、その点も忠実に訳されている。しかし、プロテスタント訳では「その人」とあり、曖昧な訳となっている。

一般にプロテスタント訳は、文法的に忠実な訳であろうとするよりも、むしろ日本語の表現における分かりやすさ、歯切れの良さなどを求め、その文体が読者に対して力強く訴えかける力を得ることに努めているように見える。

一方のニコライ・木菟麿訳は、むしろ訳語の精確さを追求している。例えば「…なればなり」「…すればなり」という語句は、日本語としてややくどい表現に思われるが、これは、希 ὅτι 露 ибо（なぜなら～だからだ）という接続詞の意味を、精確に反映させようとする意図に基づいているのである。

他にも、ニコライ・木菟麿訳が難解に思われる理由として、例えば「神（しん）」「福（さいはひ）」などの漢訳聖書に影響を受けた用語や、その独特な漢文訓読体が挙げられる。こうした点については、当時から批判もあった。『ニコライ日記』一九一〇年（明治四三）三月二日には、『祭日経』の翻訳に関して、次のように記されている。

わたしと中井はこの翻訳が気に入っている。どうして気に入らないことがあろう！　自画自賛といったところか。しかし、全部が全部、皆に理解できるものとは言えない。多くの箇所は、漢字がわかる者なら、それを見て理解するだろうが、耳で聴くと、学問のある者さえ、どの箇所でも意味がすぐわかるというわけにはゆくまい。学問のない者には理解できないことが多いだろう。教会スラヴ語のテキストが、多くの点で、ロシアの平民たちには理解できないのと同じように。だがどうすればよいのだろうか。どうして、だれにでもわかる和語を採用できるだろうか。どうしても漢語を取り入れざるをえない。しかし、そのかわり、われわれの訳の場合、目で読む場合にはすべてが明瞭だ。言わんとするところは水晶のように透明で、すべて説明し解釈することができる。

意外に思われるかも知れないが、ロシア語による聖書が初めて出版されたのは、ようやく一八六七年になって

からである。現在でもロシア正教の奉神礼では教会スラヴ語が用いられており、聖職者であるニコライにとって、聖典の文体が荘重古雅な古典語によらねばならいのは、自明のことであった。

ニコライは、Д・М・ポズニェーエフに対して、次のように語ったという。

わたしは、福音書や奉神礼用諸書の翻訳が大衆の教育程度まで降りてゆくべきではなく、逆に、信者たちが福音書や聖体礼儀用諸書のテキストを理解できるところまで昇ってゆくべきだと考えているのです。福音書に卑俗な言葉を用いるのは認め難いことです。(二〇)

つまり、ニコライと木菟麿は、ギリシャ語やスラヴ語の原典に忠実な翻訳を追求しつつ、一方では、その成果をいかにして荘重古雅な漢文訓読体によって綴っていくのかという困難な課題に対して、長年に渡って取り組み続けたのである。

そして、このような長期に渡る二人の訳業を支えていたのが、実は日本語に対する信頼と愛情であった。『ニコライ日記』一八九七年（明治三〇）五月一八日には次のようにある。

わたしと中井にとって、日本語は聖書を翻訳するのに十分な言語である。〔中略〕日本語は、この偉大にして発達した国民が万象を、そして万象について、表現する手段として過不足ない。

ニコライと木菟麿が翻訳した聖典の数々は、完成から百年以上を経た今も、日本中の正教会で読まれ、唱えられ、歌われ続けているのである。

終子の活動と「楓幃女塾」の開設

中井家が上京した際、終子はまだ五歳に過ぎなかった。上京して間もなくの明治一五年（一八八二）九月より、終子は自宅に近い東京女子師範学校附属幼稚園に入園した。その後、同小学校に進学したが、成績優秀のため飛び級をしてから体調を崩したため、ニコライの勧めもあり、明治一九年（一八八六）九月より正教会附属の東京女子神学校に編入学した。

終子は明治二六年（一八九三）七月に一六歳で東京女子神学校を卒業し、そのまま教師になることを勧められ

た。しかし、自ら未熟であるとして辞退し、自宅で二年間修養を積んだ後、同二八年（一八九五）九月より母校の漢文および東洋史の教師となった。

他のキリスト教、特にプロテスタント諸派においては、先進の欧米文化や英語習得を魅力として入信する者が多かった。それに比べて正教では、先述したようにニコライ自身が日本の古典文化や漢学に対して深い知識と愛情を持っていたため、附属の神学校では依然として伝統的教養の充実が図られていた。そのような環境の中、儒家の末裔である木菟麿と終子は、正教会内で深い尊敬を受けていたのである。

終子は教職以外にも、様々な活動を展開している。例えば、それまで沈滞気味であった女性組織「正教婦人矜恤会」の事務局を自宅に移し、煩瑣な事務を自ら引き受けて、各地に援助金を送るなどしている。日露戦争時には「恤兵通信隊」の組織を図り、明治三九年（一九〇六）には、新しく設立された「基督正教婦人会」の主任幹事にも選ばれている。

また、明治二五年（一八九二）より明治四〇年（一九〇七）にかけて、木菟麿が責任者となって女性文芸誌『裏錦』が発行された。終子もまた『裏錦』に和歌や漢文、随筆などを投稿している。大半は教育論や道徳論であるが、「夢謁履軒先生記」（一〇五号）、「蕉園中井先生略傳」（一一〇号）などは、懐徳堂との関係からも興味深い内容である。また、履軒の『老婆心』が八二号に翻刻掲載され、あるいは表紙裏に懐徳堂先賢遺稿の抜粋が毎号掲載されていた時期もあり、二人が東京の正教会内にあっても、『裏錦』によって懐徳堂の顕彰を忘れなかったことは、注意すべきであろう。

終子はまた、同僚で佐々木信綱門下であった酒井澄子（本書第四章参照）と共に歌会「夕秀舎」を自宅で主催し、会員の作品を『裏錦』に掲載した。こうした終子や澄子の薫陶もあり、当時の女子神学校の卒業者は、みな作歌が一人前にできるようになったという。

こうした中で特に注目されるのは、自宅における「楓幃女塾」の開設であろう。『裏錦』一一〇号（明治三四年一二月）に掲載された開設広告は、本書にも引用されているが、重要であると思われるので重ねて以下に載せる。

わが家五世儒を業とし弦誦渝らざること一百四十余年なりしが明治二年懐徳堂院帷を撤してより以来講學の業癈すること久し家兄黄裳先業の紹がざるを悲み懐徳堂院を大阪に水哉館幷に水哉館女学を京都に重建せむと欲し明治二十六年其意見書を發して四

方の賛襄を求めたりといへども時否にして事業成立せず且其奉ずる所の翻經の聖業も亦癈すべからざる者あるを省みて遂に其志を滅するに至りしが不肖黄離この間に生長して時正に女學の興隆するに會ひ自ら其淺劣なるを忘れ私に家兄の志を繼ぎて女子教育の爲に力を効さむと欲し茲に家兄が監督の下に一女塾を開き小より大に及ぼして建學の日を見むことを期す其育養の道は概重建水哉館意見に載する所に從ひて家兄の初志を實行するにあり有志淑女の來學を俟つ

ここで触れられている木菟麿の『重建懐徳堂意見』『重建水哉館意見』によれば、木菟麿は懐徳堂を男子教育の場に、水哉館を女子教育の場にする計画を立てていた[一二]。『裏錦』一一一号に掲載された木菟麿の漢文「送洛汭五子」を読むと、明治三五年（一九〇二）二月、漢学の弟子であった高橋五子（いね）（本書第六章参照）が舎監となって開設された京都女子神学校について、あたかも水哉館の再興であるかのように喜んでいる。また『重建水哉館意見』には、女流文学を盛んにして女性の精神を高める計画が書かれているが、『裏錦』の発行には、こうした木菟麿の意向が強く働いていたと考えられる。

このように、「楓幃女塾」の開設については、終子もまた兄木菟麿と共に家塾復興の希望を持ち、中井家嫡流としての強い自覚を抱いていたことが知られるのである。

なお、「楓幃女塾」の「楓」の由来についてであるが、終子の随筆「妓女蘿」（『裏錦』一一七号）によれば、実際に中井家の借家の庭には楓が生えていたようである。これは、木菟麿が聖典翻訳の記念に植えたもののようで、最後は石町の大阪正教会に移し替えられたが、戦災で焼けてしまったという。

明治二八年（一八九五）二月一日に書かれた終子の随筆『ちるもみちはの記』[一三]の「はしかき」には次のようにある。

紅波随風兮逐浪、豈丹心兮願作、噫嘻草芥兮與とは、わが曽祖なる履軒の君が楓を詠じたまひたるからうたの詞にて、こを熟紙にかきすてたまひたるが吾が家に殘れるを、このごろ兄の君ふるきほんごのうちよりとりいでて、楓はながめづるものなるを、曽祖の君が御筆の殊更にこれのみ殘りたらんは、なに珍きゆかりやあらんとてたまひつ。おしいただきてうくる心のまたかく嬉しきままに、いかでこに因みて、かく大和の言の葉つづらばやとはおもひぬれ

ど、才たらぬ身のうかびいづべくもあらねば、いまはただ忘れぬためとて、こを吾が楓幃の記號には用ひぬ。

履軒の漢詩集『履軒古風』[二四]巻四には、確かに「楓賦」と題された古体詩が載せられている。その冒頭は次のように始まる。

何衆木之參差兮　何ぞ衆木の參差（しんし）として
見蒼蒼之無私　蒼蒼の無私たるを見んや
物随性而不撓兮　物は性に随（したが）ひて撓（たわ）まず
各呈妍而獻媚　各（おのおの）妍を呈して媚を獻ず

ただ外見が美しいのみならず、撓むことなく凛（りん）として立つ楓の姿に、終子は自らの理想を託していたのであろうか。

この「楓幃女塾」には、主に正教徒の子女が通ったようだが、注目すべきは、終子が多くの清国留学生をも生徒として受け入れ、あるいは交流していたことであろう。深い漢学の素養と、キリスト教に基づく平等愛の思想を兼ね備えていた終子を慕って、三〇名以上の留学生が集まった。その中には、後に民国政府の要人となった曹汝霖、鈕永建や、革命家の程家檉、詩人の蒋智由など、多くの優れた人々の名前が見られる。

終子の「楓幃女塾」は、懐徳堂との関係のみならず、女性教育史や、日中文化交流史の面からも注目すべき存在であろう。

懐徳堂の復興

木菟麿と終子が、懐徳堂の遺品保存に心を砕き、結果としてそれらが散逸を免れて今日まで引き継がれてきたことは、既にこれまでの研究でも明らかにされている。[二五]一家が上京した際、木菟麿は遺品の大半を東京へ運び、一部は縁戚の淡輪家に預けた。東京では、ニコライの許しを得てそれらを主教館の一室に保管し、一部の貴重資料は慎重を期して帝国博物館に寄託した。

木菟麿が正教信仰と並んで生涯追い求め続けたのは、先祖の営んだ懐徳堂および水哉館の復興であった。明治二十六年（一八九三）の復興計画については先述したが、木菟麿は「己巳殘愁録」に当時の状況を述べている。

その後は明治廿六年に重建懐徳堂意見五十條を作りて、書院創立の一百七十年、寛政再造の一百年で

ある明治廿八年を期して、再興を企てた事があったが、然るべき後援者もなく、方法も極めて拙劣であったばかりでなく、或一のさはりとなった事もあった。それは、余は孔教を尊崇すると共に基督正教を信奉して、教育上に特殊の意見を立て、基督正教を經となし、孔教を緯とするでなければ、完備なる教育は成立たない、今の世に當りて、孔教己を死守して、他を顧みないものは、孔道の本旨を得た者でない、といふ意見を持ってゐたので、所謂認識不足の人々には、之を容るゝほどの器量を具へてゐなかったので、遂に實行不可能の事となってしまった。

明治二十六年当時の『重建懐徳堂意見』には、次のようにある。

余之所以欲施乎懐徳書院之倫理道徳法、有二焉。曰、聖教道徳法、曰、儒教。聖教以爲本、儒教以爲支。聖教謂何。曰、救世主耶蘇基督所宣之道也。是人之所不敢取焉、而余之所取也。

木菟麿にとっての「懐徳堂」「水哉館」とは、単に過去に存在した家塾の模倣ではなく、ましてや後の重建懐徳堂のように、広く大阪市民に漢学や東洋学を学ぶ機会を提供する学術機関でもなかった。それは、儒教とキリスト教が融合した、人格練磨のための信仰と道徳教育の場として構想されていたのである。後に木菟麿と重建懐徳堂の人々との間に越え難い溝ができたのは、重建懐徳堂を中井家の家塾の後継とするか否かの問題と共に、木菟麿の教育に対する理想論も関係していたのである。

明治四一年（一九〇八）、木菟麿は知遇のあった重野安繹（しげのやすつぐ）（一八二七～一九一〇）の紹介で、重野の弟子であった西村時彦（にしむらときひこ）（号は天囚、一八六五～一九二四）に懐徳堂先賢公祭の助力を請うた。これがきっかけとなり、遂に同四四年（一九一一）には記念祭典が開かれ、大正二年（一九一三）には財団法人懐徳堂記念会が設立された。

この記念祭典について、『ニコライ日記』一九一一年一〇月五日には次のようにある。

大阪ではきょう、大阪市の由緒ある学者の家系である中井家を記念して、盛大な集会や演説などが行われた。中井家の学者たちは、わたしと共同で翻訳をしているパウェル中井の先祖である。かれは数日前に大阪へ発ち、記念館に収めるため、先祖の遺品をすべて持っていった。わたしは、われわれ二人が

作った聖書と奉神礼用諸書の翻訳も、すべて記念館に持っていったらどうかと、かれに勧めた。これは、かれの先祖らの学問的業績を継いだ立派な成果と言ってよいものだろう。しかし、中井は前もって記念会の主催者から許可を得ずに、そうしたものを持ってゆくのは、気がとがめると言っていた。どうやら許可は下りなかったようで、かれはこちらから持ってゆく本を求めてこなかった。それでも、わたしは、翻訳局記者のペトル石川〔喜三郎〕にそれらの本を持たせて、大阪へ行かせると申し出た。ほかの演説者らによる中井の先祖らへの賛辞がすべて終わったあとに、石川に中井について結びの演説をしてもらうためにである。つまり中井は、現存している中井家の子孫でありながら、別の方面で、すなわち異教ではなくキリスト教の場で仕事をしているために、敬われていないのにちがいないからだ。

この短文には、正教会と重建懐徳堂の間にあって引き裂かれている木菟麿の立場が、良く表されている。また、ニコライが木菟麿の翻訳を「先祖らの学問的業績を継いだ立派な成果」と記しているのは、興味ある指摘ではないだろうか。『回天新報』であれ、聖典翻訳であれ、『裏錦』であれ、それらは全て木菟麿という特異な個性を通して現れた、懐徳堂の精神的遺産の一部なのかも知れないのである。

終わりに

紙幅の関係で詳しくは触れられなかったが、明治四五年（一九一二）二月一六日のニコライの死後、木菟麿は翻訳の続行を拒否され、編集業務からも外され、神学校の一教師とされた。終子も衰退する母校に対し断腸の思いで見切りをつけ、一家は帰阪することとなった。木菟麿と終子は共に梅花高等女学校に就職したが、退職後も年金はほとんどなかった。退職後、終子は南刀根山の借家で遂に「水哉館」と名付けた私塾を開いたが、もはや漢学や歌学の教授で生計が成り立つ時代ではなく、それは間もなく閉じられることとなった。

老身の終子が、一家を支えるために職を求めてさまよう箇所は、強く読者の心を打つ。「しかし、不思議なのだが、日記を読んでいると、その旧友や教え子たちの間をさ迷い歩いている老いた中井終子の姿が、確かな生きた存在として感動を与え、われわれに呼びかけてくるのを感じる。」（本書五〇六頁）

これまで断片的にしか語られてこなかった木菟麿と終子の姿が、こうした精緻な調査を踏まえた本書の記述によって、初めて血の通った全体像として描かれ得たと言っても過言ではない。そして、本書が単なる事実の羅列に終わらず、二人の誠実な人生を生き生きと描き出し得ているのは、取りも直さず、二人の上に注がれる著者の鋭くもまた温かな眼差しによるものではないだろうか。

懐徳堂の研究からすれば、あるいは木菟麿や終子の人生や活動については、Postscript に過ぎないのかも知れない。しかし、中井家の末裔である二人の人生には、懐徳堂史のみならず、キリスト教受容史、女性史、教育史、日中・日露文化交流史など、多様な側面から解き明かされるべき問題も多い。木菟麿と終子の残した数多くの日記や記録類は、今もなお読み解かれるべき日を待ち続けているのではないのだろうか。

注

○本稿の各所で引用されている『ニコライ日記』は、全て『宣教師ニコライの全日記』（全九冊、中村健之介監修、教文館、二〇〇七年）からの引用による。日付はグレゴリウス暦による。なお、検索は年月日により容易にできるので、引用箇所の巻数および頁数はいちいち記載しなかった。

（一）井上了「中井竹山の子女について―『奠陰集』を中心に―」（『懐徳堂センター報』二〇〇九年）一一五頁。

（二）『懐徳』一〇号、一九三二年。

（三）中井終子「ニコライ大主教と中井家との関係（一）」（『正教時報』昭和二六年七月十日）

なお、木菟麿の学歴について、大阪教育大学附属図書館に問い合わせた所、当時の資料は全て廃棄されたとのことで、事実確認はできなかった。

（四）大阪における正教会の伝教過程については、牛丸康夫『大阪正教会百年史譚』（大阪ハリストス正教会、一九七八年）二～七頁に詳しい。

また、『ニコライ日記』一八八二年六月一二日には、「正教の言葉が最初に伝えられたのは、一八七七年、パウェル新妻

がこの地が伝教に適しているかどうかを見に、パウェル橘を伴って大阪を訪問した時にさかのぼる。新妻が自分の任務で東京に帰ったあと、橘がここに残り、とりわけいまのアヴラアム長与に伝教した。」とある。

（五）　牛丸康夫『大阪正教会百年史譚』および本書『ニコライ堂の女性たち』には、長與貫一の姓について「長興」と記しているが、誤記である。

大阪正教会所蔵「メトリカ（洗礼簿）」には、最初にアヴラアム長與貫一の名が記されている。誕生は文政六年（一八二三）、旧宗法華とある。『ニコライ日記』一八八二年（明治一五）六月一三日には、このアヴラアム長与は裕福な暮らしをしているとあるが、残念ながら職業は記されていない。

また、「メトリカ」の同日付には、ダビート長與真造の名が記されている。安政五年（一八五八）生まれ、旧宗法華、肥前國大村平民とあるから、貫一の息子か親族であろう。『ニコライ日記』一八八二年六月一二日には、ダヴィド長與が当時二五歳で、東京の佐々木医院で医学を勉強中とある。

梅溪昇『緒方洪庵と適塾』（大阪大学出版会、一九九六年）一四二～一四三頁によれば、長崎県の適塾入門者には、長與專齋と共に、長與誠一の名が見えるという。誠一も大村藩代々の医官で、專齋の祖父俊達の養子であった。專齋より先に適塾に入門したというから、專齋より年上であったと考えられる。また、貫一も專齋より一五歳年上である。貫一と誠一は、同年代で、名前に同じ「一」を共有している所からも、兄弟であるか、少なくとも同族である可能性が高いのではないか。

余談だが、澤邊琢磨（坂本龍馬の従兄）や浦野太藏と共に、日本で最初に正教の洗礼を受けた酒井篤禮（とくれい）は、同じく適塾の出身であり、その娘の澄子は、後に東京女子神学校の教員として終子の同僚となった。

（六）　『大阪府薬百年史』（大阪府薬剤師会、一九九三年）二一頁の一八七三年（明治六）年表に、「大阪薬業社有志、オランダ人ドワルスを招いて今橋に化学研究機関精々舎を設立（洋式薬局と呼ばれたが薬品鑑定を行い、製薬法等の薬学教育も実施）」とある。

（七）　中井終子「安政以降の大阪學校」（『懐徳』九号、一九三二年）によれば、懐徳堂の一行が秋の茸狩りで箕面に赴いた際は、萱野家で逗留することが習わしであったという。

（八）　木村武夫「浪華畫學校の顚末」（魚住惣五郎編『大阪文化史研究』、星野書店、一九四三年、三七五～四〇一頁）によれば、明治一七年頃、同じ道修町五丁目二七番地に、樋口三郎兵衛（一八六三～一九三三）が「浪華畫學校」を開設している。樋口家は道修町の旧家で、三郎兵衛は他家から養子に入った人だが、明治一三年頃には魁新聞社や樋口銀行の開設にも関わるほどの資産家であった。なお、この樋口三郎兵衛は、明治六

年から明治一二年まで小学校の教員を務めており、時期的には木菟麿の教員時代とほぼ重なる。ただし、この「浪華書學校の顚末」には、三郎兵衛の宗旨や信仰には触れられておらず、この「樋口宅」が三郎兵衛のものであったかどうかは未だ確言できない。

（九）『ニコライ日記』一八八二年六月一二日には、当時の大阪における正教徒の実態が詳細に記されており、興味深い。日記によれば、当時の大阪教会の信徒は七一名（二七戸）だった。「わが教派の信徒はほとんどが西区と北区。（南区にはよい家はないので、伝教には適さない。〔下略〕）」とあり、このような記述からも、当時、正教に入信した人々の社会階層が推測され得る。

（一〇）北崎豊二「若き日の中井木菟麻呂―『回天新報』とのかかわりを中心に―」（『大阪経大論集』第四二巻六号、一九九一年）

（一一）北崎氏の同論文によれば、『回天新報』について、明治一二年（一八七九）六月一五日発行の第一六号までは内容が確認できるが、次の第一七号から最終の第二三号までは内容が不明となっており、これは七月の副伝教者就任と時期が全く一致している。

また、同論文に引用されている福良虎雄編『大阪の新聞』によれば、「〔『回天新報』は〕後に土佐の奇人高崎芳宣といふ人が執筆をしてゐたが、翌十二年九月僅に一箇年間で廃刊をした。」とあるが、これは副伝教者就任に伴い、木菟麿が一七号以降の編集を高崎芳宣に譲ったという意味に取れば、全て辻褄が合う。

北崎氏は同論文において、木菟麿が『回天新報』の廃刊後に正教に入信したと前後逆に誤解されているが、後に執筆された同氏による論文「中井木菟麿の水哉館再興計画―昭和初年の場合―」（『懐徳』六八号、二〇〇年）では順序が訂正されている。

（一二）ディアナ号の事件、および『拝恩志喜』については、湯浅邦弘「ロシア軍艦ディアナ号と懐徳堂」（湯浅邦弘編『懐徳堂研究』、汲古書院、二〇〇七、三二五～三四四頁）に詳しい。

（一三）『ニコライ日記』一八九六年五月二日による。木菟麿は、孝行のために月給二五円を全て義母春に手渡し、本人は春から二円しか受け取っていなかったとある。

（一四）中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波新書四五八、岩波書店、一九九六年）一〇四頁。

（一五）J・M・ポズニェーエフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』（もんじゅ選書二五、講談社、一九八六年）七頁。

（一六）中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』四三～四四頁。

（一七）正教会の聖典翻訳については、牛丸康夫『日本正教史』四五～四九、九一～九四頁、および海老澤有道『日本の聖書―聖書和訳の歴史』（講談社学術文庫、講談社、一九八九年）

三六四～三七五頁を参照。

（一八）『黄裳齋日記』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵、E282）

（一九）聖書各文の引用元書誌は以下の通りである。

・ギリシャ語原文

川端由喜夫編訳『日本語対訳ギリシア語新約聖書　一　マタイによる福音書』（教文館、一九九一年）

・ロシア語訳

Библия. Книги священного писания ветхого и нового завета. Канонические. В русском переводе с параллельными местами и словарем. Российское библейское общество. 2000.

なお、このロシア語訳聖書については、К・И・ロガチョーフ、中村健之介訳・解説「一八七六年ロシア語聖書」（『窓』三五号、一九八三年）に詳しい。

・漢訳『新遺詔聖經』

「信望愛信仰與聖經資料中心」ホームページ上のサイト「珍本聖經數位典藏查詢系統」（http://cbol.fhl.net/new/obhtml）に掲載されている原本画像を参照。

・ニコライおよび木菟麿訳

日本正教会翻訳『我主イイススハリストスの新約』（正教本会版、一九八五年）

・プロテスタント訳

『舊新約聖書』（日本聖書協会、一九九二年）

（二〇）Д・М・ポズニェーエフ著、中村健之介訳『明治日本とニコライ大主教』六二頁。

（二一）『裏錦』は、『国立国会図書館所蔵近代日本婦人雑誌集成』（日本図書センター、一九九二年）の一部としてマイクロフィルム化されている。

（二二）中井木菟麿『重建懐徳堂意見』『重建水哉館意見』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵、E115およびE119）

なお、木菟麿の懐徳堂および水哉館復興計画については、北崎豊二「中井木菟麿の水哉館再興計画―昭和初年の場合―」（『懐徳』六八号、二〇〇年）に詳しい。

（二三）中井終子『ちるもみちはの記』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵、E150・中井終子関係三・三八七）

（二四）中井履軒『履軒古風』（大阪大学附属図書館懐徳堂文庫所蔵、E138）

なお、『履軒古風』に載せられている「楓賦」の詩句は、終子が『ちるもみちはの記』で引用したものとはやや異なる。

抵巖磯而揚紅波。随風兮遂浪。豈丹心兮攸願作。噫嘻草芥兮與同流。聊任運兮乗化。

終子が見たのは「ほんご（反故）」とあるので、履軒の草稿だったのであろうか。

（二五）　中井家の遺品が大阪大学に収蔵された経緯については、竹腰礼子「大阪大学懐徳堂文庫のなりたちと蒐集の経緯」（『懐徳』七〇号、二〇〇二年）、および同「懐徳堂文庫を守った人―中井木菟麻呂翁の功績」（『大阪あーかいぶず』二号、一九八七年）に詳しい。

なお、本稿の執筆に際し、「メトリカ」など貴重資料の閲覧を快くお許しいただいた、ダヴィド水口優明神父様を初め、大阪ハリストス正教会の皆様方には、この場をお借りして深く感謝申し上げます。ありがとうございました。